

6 年 国 語 科 学 習 指 導 案

1. 日 時 令和6年6月6日(木) 第5時限 (13:35~14:20)

2. 学年・組 6年〇組(在籍〇名)

3. 単 元 名 「筆者の論の進め方をとらえよう」

教材(「イースター島にはなぜ森林がないのか」 東京書籍)

4. 単元の関連と系統

前単元(5年1月)	本単元(5月)	次単元(7月)
ロボットとの未来について考えよう 『弱いロボット』だからできること ○二つの文章を読み,ロボットとの未来について考えたことを話し合うことができる。	筆者の論の進め方をとらえよう 「イースター島にはなぜ森林がないのか」 ○筆者が自分の考えを読み手に納得してもらうため,どのように論を進めているか,考えることができる。	インターネットでの議論から考えよう 「インターネットの投稿を読み比べよう」 ○複数の投稿を読み比べて説得の工夫を考え,自分の意見をまとめることができる。

5. 学習目標

- 筆者が自分の考えを読み手に納得してもらうため,どのように論を進めているか考えることができる。
- ・原因と結果など情報と情報との関係について理解することができる。
- ・事実と感想,意見などの関係を,叙述をもとに押さえ,文章全体の構成を捉えて要旨を把握することができる。
- ・進んで文章の構成を捉え,学習の見通しを持って筆者の論の進め方について考えをまとめようとする。

6. 評価規準

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
・原因と結果など情報と情報との関係について理解している。	・「読むこと」において,事実と感想,意見などの関係を叙述をもとに押さえ,文章全体の構成を捉えて要旨を把握している。 ・「読むこと」において,目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけたり,論の進め方について考えたりしている。	・進んで文章の構成を捉え,学習の見通しを持って筆者の論の進め方について考えをまとめようとしている。

7. 指導にあたって

(児童観)

本学級の児童は,国語科の学習に対して意欲的である。令和5年度の大阪市学力経年調査の児童質問紙における「国語科の学習は好きですか」の質問から,「当てはまる」と回答した児童が43.1%(前々年度34.3%),「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童が32.3%(前々年度50.7%)と最も肯定的な回答をした割合が増えていることが分かった。また,「国語の授業の内容はよく分かりますか」の質問に対しても「当てはま

る」が80.0%（前々年度52.2%）、「どちらかといえば当てはまる」が13.8（前々年度31.3%）と最も肯定的な回答をしている児童の割合が27.8%上がっていた。このことから児童の国語科に対する学習意欲と内容理解度は高まってきたことが窺える。また、大阪市学力経年調査における物語文の読解においても、大問4の（1）（2）登場人物の心情について、描写を基に捉える問題の正答率は（1）82.8%、（2）72.1%であった。（3）文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げる問題では79.9%という正答率であった。

このことから、物語文に対する読解力は着実に力を付けてきている状態である。5年生「大造じいさんとがん」の学習では、情景描写、心情描写、行動描写に注目して登場人物の心情を読み取って朗読しようとする姿が見られた。6年生の4月に学習した物語文「さなぎたちの教室」でも、これまでの学習を生かして朗読を行うことができた。

しかし、課題も見受けられる。大阪市学力経年調査における大問5、説明文の内容を読み取る問題では、（1）叙述を基に文章の内容を捉える問題の正答率が70.8%であった。（2）文章全体の構成を捉える問題の正答率においては76.8%という結果であった。この2問においては物語文の正答率と比べても大きな課題ではないと考える。しかし、（3）情報と情報との関係について理解し、文章の情報を整理する問題では、27.6%と、非常に正答率が低いことが分かった。児童は文章の内容を捉えたり、文章全体がどのように構成されているかを読み取ることはできているが、文章の中の情報と情報の関係を理解したり、整理したりすることに対しては難しさを感じているようである。6年生になってから、まだ説明文は学習していない。しかし、5年生の時に学習した「弱いロボットだからできること」の学習でも、テクノロジーの進歩の是非について自分の考えを持ったり、文章を書いたりすることはできているが、本文の中から根拠を見つけたり、それらを整理したりして自分の考えを深めたりということに関しては十分ではない児童もいる。

また、新学年になりクラスのメンバーや担任が変わったことなどから、グループで話し合う、聞き合う、まとめるといったことにはまだ消極的な場面が見られ、話し合いが進まず個人の意見を全体の場で発表するといったことも少なくない。特定の児童が発言をして学習のまとめを行うこともある。今後の学習では、より多くの児童がグループで話し合い、意見を共有したりまとめたりする学習を通して、自分の考えを広げ深めることが必要である。

（単元観）

本教材「イースター島にはなぜ森林がないのか」は、尾括型（筆者の主張が最後）の説明文である。尾括型は、筆者が書いていることと読み手が考えていくことが順に対応しているので、じっくり読み進めていくのに適した型の説明文である。本教材は序論・本論・結論が28の形式段落に分けられている。序論（①②）はイースター島の概要を述べ森林がないことを説明している。そして、本論③から「イースター島の森林は、なぜ、どのようにして失われてしまったのだろうか。」と課題提示をし本論（④～⑮）で森林が失われた原因とその結果をまとめている。農地の開墾（⑨⑩）、造船（⑪⑫）、モアイ像の運搬（⑬⑭⑮）を目的とした人間による森林伐採と、ラットがもたらした生態系への影響（⑲⑳）である。それぞれの段落は、筆者の主張である「持続可能な社会づくりのための自然との共生」に説得力を持たせるため、失敗した事例として挙げられている。

それらを踏まえ、結論（㉑㉒）では筆者の主張がなされている。文末表現は両段落とも筆者の意見として、「祖先を敬うためにモアイ像を作った人々は数世代後の子孫の悲惨な暮らしを想像することができなかったのだろうか。」「しかし、今後の人類の存続は、むしろ、子孫に思いをめぐらす文化を早急に築けるかどうかにかかっているのではないだろうか。」としている。持続可能な社会の重要性を説きつつも、読み手に考えを委ねる工夫がなされている。

以上のことから本教材は事実や事例と筆者の考え、原因と結果などの情報と情報の関係など、論の進め方を読み取ることに適した教材である。

(指導観)

本単元では、筆者の論の進め方について自分の考えをまとめ交流するという言語活動を設定した。

第Ⅰ次では、まず本文全体を通読する。児童がイースター島について興味関心を持てるように、教科書のイースター島の地図を拡大したものやモアイ像の写真を掲示する。また、デジタル教科書を活用してイースター島の概要を動画で提示することも併せて行っていく。読み終えた後は、「言葉の力」を示し、本単元で身に付けていきたい力を確認するようにする。そして、本文を読み進めていくためには情報を整理し、事例を原因と結果に分けること、筆者の主張を明らかにすること、筆者の論の進め方を説明できるようにしていくことを全体で共有し、学習に対する意欲付けを行っていく。また、児童が主体的に今後の学習の見通しを持てるように初発の感想を活用して疑問に感じたことなどを全体で共有できるようにする。(方法①)。

第Ⅱ次の第2時、第3時、第4時では、本文を序論・本論・結論に分けて、文章の構成を順を追って捉えていく。イースター島から森林がなくなった原因をまとめ、情報を整理していく。その際は、どの段落がそれぞれ原因、結果について書かれているのかをサイドラインを引きながら見付ける活動を取り入れる(方法④)。原因をまとめたら、筆者がこの説明文を通して伝えたいことは何かを全体で話し合い、要旨を捉えるようにする。第5時(本時)では、筆者がなぜこのような論の進め方をしていくのか、自分の考えを伝え合っていく。そのために、これまで学習したことを振り返って整理するために、第2時で作成した図を活用する。図から筆者がイースター島から森林がなくなった理由を「人間による森林伐採」と「ラットがもたらした生態系へのえいきょう」の二つに分けて論じていること、「人間による森林伐採」にも「農地の開墾」「造船」「モアイ像の運搬」と三つの側面に分けて考えていること、また、それらも「食糧生産」「宗教的・文化的」の二つの目的に分けられているなど、多面的に論じていることにも気付くようにする。その中で、筆者の論の進め方がどのように工夫されているかを見つけ出し、自分たちの考えを交流する活動を行う。そのために、「題名」「事例」「地図や写真」「文末表現」の4つの視点を示して児童が考えられるようにする。筆者は自身の主張をより強めるために様々な工夫をしていることに気付くようにしていく。全体で交流を図る際は、前述の視点を意識して筆者が論をどのように進めているのかを話し合うようにする。なぜ筆者はこのような論の進め方をしたのか、筆者が「持続可能な社会づくりのための自然との共生」を主張するためにイースター島の話はどのような効果を持っているのかなどを話し合う(方法③)。話し合いを通して、筆者の主張がより説得性を増すための例として本論を展開しており、それらが順序立てて分かりやすく示されていることを学習の中で考えられるようにしていく。

第Ⅲ次では、これまでの学習で行った筆者の論の進め方を振り返る。そして、次単元である「論の進め方をくふうして書く」に繋がられるように意識付けを行っていく。結果に対して何が原因と言えるのか、事実や例示をもとに考えを主張することで説得性が増すことなどを確認し、今後の学習に苦手意識を持つことなく進められるようにしていく。

また、全時間を通して振り返りを充実させるために、常に「なしともも」を意識した振り返りを書くように指導を重ねていく(方法②)。これまで「なしともも」を示すだけでは形式的な振り返りに陥りやすかったので、今回は文型を掲示し、児童がより明確に一時間で何を学習できたのかを考えて振り返りを書くことができるようにしていく。

視点	定型文
何ができたか	「今日の学習で、わたしは〇〇を〇〇することができた。」
知ったこと	「新しく〇〇することを知った。／新しく〇〇できることを知った。」
友だちの意見を聞いて	「〇〇さんの『〇〇』という意見に共感できた。なぜなら…」
もっと考えたいこと	「今日の学習で、もっと〇〇を考えたい、知りたいと思った。」

8. 学習指導計画（全6時間）

次	時	学習活動	指導・支援・評価（◇）
I	1	<p>○全文を通読して論の進め方を確認し、単元全体の見通しをもつ。</p> <p>○難語句や新出漢字の確認をする。</p>	<p>・これまでに学習した説明文を取り上げ、説明文の論の進め方について振り返るようにする。</p> <p>・ワークシートと国語辞典を用意し、教材文に出てくる語句の意味を調べ、理解できるようにする。</p> <p>◇単元の学習の見通しをもつことができている。</p>
II	2	<p>○本文を序論・本論・結論に分け、文章の構成を捉える。</p>	<p>・ワークシートを活用することで、文章の構成を捉えることができるようにする。</p> <p>◇文章の構成を捉えることができている。</p>
	3	<p>○森林がなくなった原因（1）について読み取る。</p>	<p>・「原因」と「結果」を整理できるように、サイドラインを引くようにする。</p> <p>◇本論・結論の内容を読み取り、文章の要旨を確かめることができている。</p>
	4	<p>○森林がなくなった原因（2）について読み取る。</p> <p>○本文の要旨を確かめる。</p>	<p>・「原因」と「結果」を整理できるように、サイドラインを引くようにする。</p> <p>◇本論・結論の内容を読み取り、文章の要旨を確かめることができている。</p>
III	5 (本時)	<p>○筆者の論の進め方を捉え、自分の考えを伝え合う。</p>	<p>・前時までに学習した「原因」と「結果」を整理するための図を活用できるようにする。</p> <p>・筆者の論の進め方について多面的な捉え方ができるようにするために、「題名」「事例」「地図や写真」「文末表現」に注目するように声掛けをする。</p> <p>◇筆者の論の進め方について自分の考えを伝え合うことができる。</p>
	6	<p>○これまでの学習を振り返り、筆者の論の進め方で工夫されているところや筆者の主張について自分の考えを伝え合う。</p>	<p>・筆者の論の進め方で工夫されているところを出し合い、次單元である「論の進め方をくふうして書く」で実際に自分の考えを書く時の手立てとなるようにする。</p> <p>◇単元の学習を振り返り、身に付けた「言葉の力」を確かめることができている。</p>

9. 本時の学習

(1) 目標 (5 / 6 時)

- ・文章の構成を捉えて筆者の論の進め方を確かめ,自分の考えを伝えることができる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点 (指導者の指導・支援)	評価規準
1. 前時の学習を振り返り,本時の課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・原因と結果を整理した図を黒板に掲示することで,本時の学習について確認できるようにする。 	
<p>めあて：筆者がなぜこのような論の進め方をしているのか自分の考えを伝え合おう。</p>		
<p>2. なぜ筆者がこのような論の進め方をしているのかを「題名」「事例」「地図や写真」「文末表現」の視点を基に考える。</p> <p>3. グループで交流する。</p> <p>4. 全体で交流し,本時の学習をまとめていく。</p> <p>5. 本時の振り返りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者が自身の主張の説得性を強めるためにイースター島の話をもどのように展開しているのかを考えられるようするために「題名」「事例」「地図や写真」「文末表現」の4つの視点を提示して個人で考えたい内容に絞るようにする。 ・筆者の論の進め方に納得できるか,納得できない場合,自分ならどのような「題名」を付けるか,「事例」を出すか,「地図や写真」はどのようなものを用意するかなどを考えるように声掛けをする。 ・考えたことを交流できるように,「題名」「事例」「地図や写真」「文末表現」にそれぞれ別れ,自分たちの考えたことを発表するようにする。 ・森林破壊が今後の話と関係していることに気付くようにするために,筆者の主張とイースター島の話がどのように関係しているのかを話し合う。 ・「なしともも」の視点で振り返りができるように定型文を黒板に貼り出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆者の主張に説得性を持たせるために論が展開されていることを理解している。

(3) 板書計画

<p>④ (なしとももて書く)</p>	<p>⑤ 筆者は、自分の話により説得力をつけるためにイースター島の話をしている。また、写真や地図なども効果的に活用している。</p>	<p>⑥ 「文末表現」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「広がっていったらしい。」 ↓ 本来にラットのせいかわからない。 	<p>⑦ 「地図や写真」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・モアイ像が倒れている写真が、環境破壊の結果を強くするために効果的。 	<p>⑧ 「事例」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・森林を伐採した原因（理由）と、その結果を分かりやすく説明している。 ↓ 結論で言いたいことに結び付けている。 	<p>⑨ 「題名」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今の環境問題に結びつけている。 ・読む人の興味を引きつけている。 	<p>⑩ 「筆者の主張」</p> <p>今後の人類の存続は、むしろ子孫に思いをめぐらす文化を早急に築けるかどうか。</p> <p>↓ 自然との共生、持続可能な社会</p>	<p>⑪ イースター島にはなぜ森林がないのか</p> <p>鷲谷 いづみ</p> <p>⑫ 筆者はなぜこのような論の進め方をしているのか考えよう。</p>
---------------------	--	--	---	--	--	---	---

(4) 壁面掲示

結論	本論		序論
②⑦～②⑤	②④～②③		②①①
<p>②⑥ ②⑤ ②⑦ 筆者の主張</p> <p>イースター島の歴史から教えられること</p>	<p>ラットがもたらした生態系への影響</p>	<p>人間による森林の伐採</p>	<p>イースター島のしようかい</p>
	<p>野生化したラットが、ヤシの木の再生をさまたげた。(①⑨ ②⑩)</p>	<p>問題提起 (③)</p> <p>ポリネシア人たちの上陸 (④) ⑧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・農地にするため (⑨ ⑩) ・丸木舟を作るため (⑪ ⑫) ・モアイ像を運ぶため (⑬ ⑭ ⑮) 	

10. 指導を終えて（成果○と課題●）

【子どもが主体性を発揮できる授業づくり】

○教室側面に授業のこれまでの流れを書いた模造紙を掲示することで、常に筆者の論・主張を振り返ることができた。本時の学習で何をするか、何を考えればよいかを示す際に使用し、児童が主体的に学習を進めることに繋がった。

●授業全体を通して、指導者からの問い返しをもっと積極的に行うべきだった。児童の発表、その意見に対する付け足しを繰り返す一問一答形式に近い授業展開に陥ってしまったので、自分だったらどのように論を進めるかを話し合う際に、なぜそのように思ったのか、新しい資料を提示するのであればどの箇所に入れるのが妥当かなどを問い返すことで、より主体性をもって取り組むことに繋がられた。

【協働的に学ぶ授業づくり】

○グループ協議は、「題名」「事例」「図・表・写真」「文末表現」のそれぞれ4つの視点で分かれて話し合いを行うことで、共通点や相違点を話し合うことができた。また、そこから他の児童の意見を自分の意見にも取り入れようとするなど、充実した交流活動を行うことができた。

●全体での交流活動では、グループ活動程の活発さが見られなかった。これは、筆者の論の進め方について考える際、1つの視点に絞って考えたので、別の視点で考えた児童の発表を聞いても分かりにくかったことが理由として考えられる。

【深い学びに繋がる授業づくり】

○筆者の論の進め方を「題名」「事例」「図・表・写真」「文末表現」の4つの視点に分けることで、それぞれの視点で筆者の論の進め方が妥当かを考えやすくすることができた。

○筆者の論の進め方に納得できない、もっと他にいい方法があるのではないかと考えることで、「自分だったら題名を『今後の人類の存続』にする」「自分だったらラットの写真を提示する」など自分の考えを深めていくことができた。

●4つの視点にすることで、考えを絞ることができた一方、考えを狭めてしまうことにもなってしまったので、別の視点を用意したり、児童自身が他に気になったことを取り上げてもよいことを声掛けしたりするなどの工夫が必要だった。

●自分の考えを主張する際、教科書の本文に立ち返って考えずに、あくまでも自分の思いで主張している児童も見受けられたので、筆者の論の展開に目を向けるように声掛けを重ねる必要があった。

